高橋道子、“日本語の主語はなぜ現れにくいのか—社会文化的要因としての「世間」—” in *Studies in English and American Literature*, No. 43, March 2008、要約

平井雅郎

表 1　英語と（それに対応する）日本語の主語の数

データ	一人称		二人称		三人称		合計	
	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語
語り	190	90	0	0	218	157	408	247
せりふ	54	6	26	2	51	31	131	39
合計	244	96	26	2	269	188	539	286

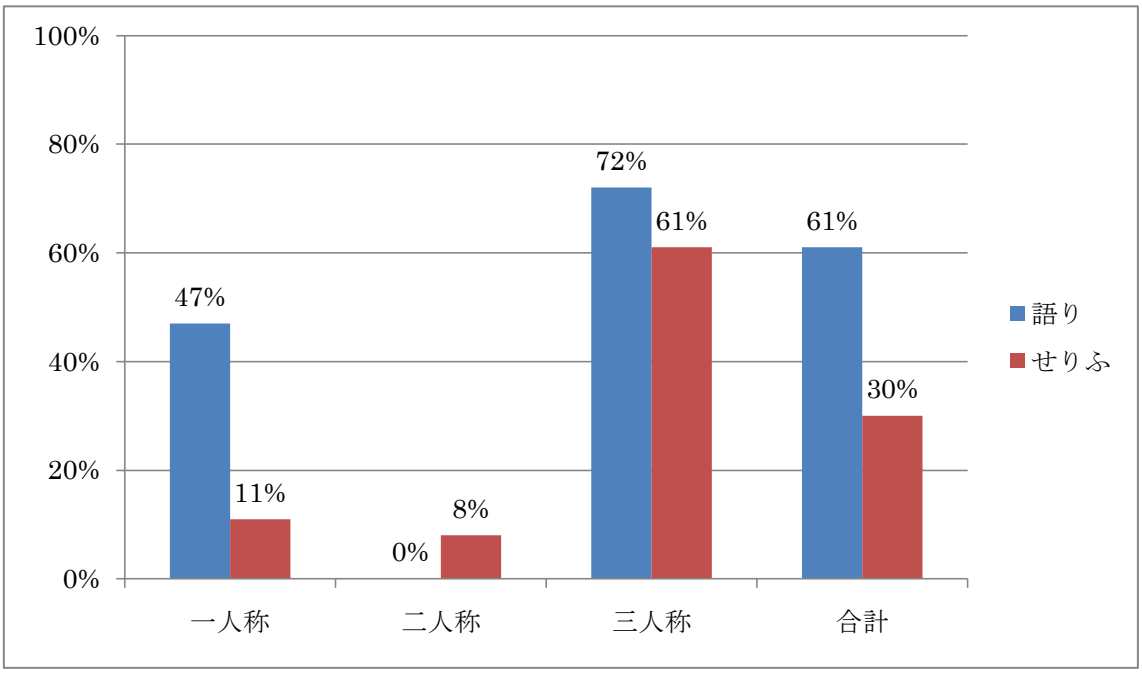

図 1（英語の主語出現率を 100 とした時の）日本語における主語出現率

本稿において、高橋は、川端康成『伊豆の踊り子』を素材にとり、原作と英語翻訳版とで、主語の出現頻度にどのような差があるかを調べた Takahashi(1999)（上掲表 1 及び図 1）をデータとして、なぜ日本語において主語が現れにくいのかについての要因を、「日本語は主語なしで文が成り立つ」という文法的制約の他、社会文化的背景の差異に求める視点から考察を行っている。高橋によれば、日本語と英語の主語の出現頻度の違いは、それらの話し手のコンテクストを見る視点の違いに由来するところがあるという。まず、一人称に

着目した場合、日本語において、「語り」と比較して「せりふ」における一人称の出現頻度が著しく低いことの要因として、「語り」においては、会話等が行われているコンテクストを外側から眺める語り手の一人称と、その場面内部に実際に参加している一人称という二つの一人称が混在しているのに対し、「せりふ」においてはその場面内部に実際に参加している一人称しか存在しないためであるという分析が与えられている。これは、英語の場合、日本語と異なり、コンテクストの外側にいようと実際に会話に参加していようと、必ず「自己を客観化して文を構成する」という性質を持っていることとの対比により成立する分析である。つまり、英語の場合、会話の「外側」の一人称も「内側」の一人称も、ともに区別せず自己を客観化して語るため、常に一人称が明示的に出現することになるが、日本語の場合は、「語り手としての一人称」たる「外側」のときは自己を客観化して語るために一人称が明示されるものの、「会話参加者としての一人称」たる「内側」のときはまさに会話に参加する者そのものとなるため、コンテクスト上自明な一人称は省略される、というわけである。一方、三人称の場合、今度は会話の内側であろうと外側であろうと、日本語、英語ともに対象が客観化されて語られることが多いため、一人称のときと比べて出現頻度におけるギャップが少ない―とは言え、それでも文法制約上日本語の方が出現頻度が低いことに変わりはないが―という分析が与えられている。

　では、このような、会話に参加しているさなかでも自己を客観化して語る英語の視点と、そのような客観化を行わず自己はあくまで会話に参加しているものという見方をする日本語の視点は、どこから生じているのであろうか。高橋は、森田(1998)を引き、日本人の視点が、古来自己を含む諸対象を俯瞰的に見るというものではなく、あくまで、自己とその周りを取り巻く諸対象との関係という視点からものを見ていたという図式を提示する。これはすなわち、日本人の視点が、『私』と、それを取り巻き、『私』に対置される『公』ないし「世間」との関係で世界を捉えていた、ということを示す。そして、このような、自己と世間という関係・コンテクストから自己を捉えるという見方を有するがゆえに、上記のように、英語とは異なった、客観化を伴わない一人称の使用のあり方が日本語において生じたのではないか、という見解を高橋は与える。すなわち、西洋、例えば英語圏においては、個人個人によって構成される「社会」という対象化された世界の一部として、自己をもまた客観的に対象化して捉える自己像を有するのに対して、日本においては、あくまで自己と「世間」との関係に視点がおかれ、そのような「世間」と自己は同列な語りの客体ではありえず、ゆえに英語のように社会の一部としての自己をも客体化して語るという語り方が存在し得なかった、というのである。そして、高橋は、一人称の使用のようなコンテクストに依存した主語の使用のあり方も、発話のコンテクストが「世間」の中にある以上、「世間」の求めに応じたものである必要がでてくるとし、このような事情を勘案すると、「世間」と言語使用との関係に関する更なる研究が必要ではないかと結ぶ。

【引用文献】

森田良行 1998 『日本人の発想、日本語の表現―「私の」立場がことばを決める』東京：中央公論社

Takahashi, Michiko 1999 Ellipsis of subjects in Japanese: A case study of a Japanese novel in comparison with its English translation. *Proceedings of TACL summer institute of linguistics 1999.* 131-140. Tokyo: Tokyo area circle of linguistics.